

サンデル教授の「ハーバード大学哲学講義」はなぜ人気があるのか

島崎 隆(『季論21』第11号、2011年)

## 一 はじめに

創立一六三六年、アメリカ建国よりも古い歴史と伝統を誇るハーバード大学で履修学生数が最高記録を更新した講義が、政治哲学者マイケル・サンデル教授(五七歳)による「正義 justice」というものである(延べ一四〇〇〇人の履修者数があったという)。大学の劇場も兼ねた大教室で、毎回一〇〇〇人以上の学生が参加しているが、あまりの人気ぶりに大学がこの講義の公開に踏み切ったのである。そしてこの講義は、二〇一〇年の四月から六月にかけて、NHKで一二回に分けて放映された。それぞれの講義はさらに、内部に二つずつのレクチャーを含んでいる。それぞれの講義のテーマは以下のとおりである。

「殺人に正義はあるのか」「命に値段がつけられるのか」「『富』はだれのもの」「この土地はだれのもの」「お金で買えるもの、買えないもの」「動機と結果 どちらが大切」「嘘をつかない練習」「能力主義に正義はない?」「入学資格を議論する」「アリストテレスは死んでいない」「愛国心と正義 どちらが大切?」「善き生を追求する」<sup>1</sup>

最終回の第二レクチャーは、総括的なものになっている。私はこのなかで、第六、一〇、一一、一二回の講義をテレビで視聴した。この講義の放映の最中に、この講義内容をほぼ再現した著作『これからの「正義」の話をしよう」<sup>2</sup>の翻訳が日本で出版された。この著作は全米ベストセラーになったが、そこでは、学生との質疑応答のやりとりは省略されている。つまりそこでは、この講義のもっとも大きな特色(ディベート型講義であること)は伝えられていない。だがそののち、この講義の実況中継的な記録が出版され、サンデル氏のその生き生きとした講義ぶりが臨場感をともなって伝えられることになった<sup>3</sup>。また本書

---

<sup>1</sup> NHKのHPより。<http://www.nhk.or.jp/harvard/about.html> 二〇一〇年八月一四日採録。

<sup>2</sup> マイケル・サンデル『これからの「正義」の話をしよう ――いまを生き延びるための哲学』(鬼塚忍訳)早川書房、二〇一〇年。すでに五月発行から一月後に、三三版(一〇月時点で四〇万部)に達している。以下、本文中で、①〇〇頁と略記する。

<sup>3</sup> サンデル『ハーバード白熱教室+東大特別授業』(小林正弥・杉田晶子訳)上・下、早川書房、二〇一〇年。なお、第六回は「なぜ人を使ってはならないのか」(上)となって

の上下巻に、東大における氏の来日特別授業（二〇一〇年八月実施）の内容が、やはり質疑応答をともなって、分割されて収録されている。私はこの内容に関するテレビ放送も視聴した。

以下では、氏の講義のなかで、学生たちが（氏とともに）相互にいかに関論するのか、そのなかでどういう政治哲学的テーマが展開されるのかを探る。そして氏の講義のもつ特色、とくにその教育的意味に関して考えたい。なぜ氏の講義はそれほど魅力的であるのか。われわれ日本人にとって、それはどのような意味をもっているのか。

## 二 正しい殺人はあるのか？

以上の講義のテーマにあったように、「正義」（何が正しい判断や行為であるのか）を中心概念として、サンデル氏は日常的な事例から始めて、政治的・道徳的な判断や行為を豊富に提出して、学生たちに問いかける。

最初の講義では「殺人に正義はあるのか」という、ややブラックジョークめいたテーマが扱われるが、たしかに裁判において死刑判決が出されるということは、その殺人に正義があったということになるだろうから、このテーマはけっして奇異なものではない。まして裁判員制度が日本でも導入されて以来、選ばれた裁判員たちは、死刑求刑に正義があるのかと自問自答しなければならないだろう。

氏が最初に出す事例はきわめて単純明快なものである（②上、一三頁以下）。自分が電車の運転手だとして、ブレーキの故障した電車を運転しており、しかも行く手の線路上に五人の作業員が働いているとする。このまま直進すれば、その五人の命を奪うことになる。だが気がつく、右側に待避線が見え、そちらにも一人の作業員が線路上で働いている。幸いハンドルは効くので、その線路にはいることも可能である。そのときに、直進するのが正しいのか、右へ曲がるのが正しいのか、運転手である君はどうするのか…。これはある意味で、「道徳的ジレンマ」である。

氏は「君ならどうするか」と発問して、そこで多数決をとる。そして右側に曲がる考えをとる多数派の学生にその根拠を聞く。ある学生は「一人を殺せばすむところを、五人も

---

おり、表題は上記のものと異なるが、同様にカント倫理学に関するテーマを扱う。以下、本文中で、②上、〇〇頁などと略記する。

殺すのは正しくないから」と答える。氏は、「一人殺せばすむところを、五人も殺すのは正しくない（一同笑）。たしかに、いい理由だ（一同笑）」と反応する。すでにここで、学生と氏の生き生きとした質疑応答が始まり、しかもそこにはユーモアが漂う。ここには、別の少数派の意見もあり、氏はその根拠も問いただす。その学生は「これは大虐殺や全体主義を正当化する心理と同じで、ある人種を残すために他の人種を消滅させるのと同じになるのではないか」というのである。この意見は私にははっきりしなかったが、人の命に優劣をつけられないという意見だと思われる。

今度は氏はすばやく質問を切り替え、自分がこの事故を見ている傍観者だとして、線路上の橋から状況を見下ろしているととても太った男を突き落として、電車を食い止めることができるとする。氏はこの提案に賛成するかどうかを学生に問い、賛成する人がいないことを確認する。そしてすかさず、「一人を犠牲にしても五人の命を助けたほうが良いという原理はどうなったのか」と、ちょっと意地の悪い質問をする。だが、あくまで論理で詰めることが肝心なのである。そこで学生たちは、「まったく無関係の人間を巻き込むことは正しくない」、「太った男を突き落とすのは、明確な殺人行為である」などと弁護するが、それにたいして、別の学生から「ハンドルを切って一人殺すのも、太った男を突き落とすのも、自分の選択であることには変わらない」という反論もなされる。こうした問答のなかで、氏は、答えた学生につねにユーモアをもって接し、「君の意見はよかったよ」、「よく答えてくれた、ありがとう」などと鼓舞する。

人によっては、以上の議論を何か人為的で屁理屈めいたものとみなすかもしれない。多分氏も、この件に関してはそうした印象が残ることを承知していることだろう。だが初発的に、何の知識もなしに議論に容易に加われる事例として、氏はこうした単純化されたものを提起したのだと思われる。いずれにせよ、大事なことは、ある判断や行為の正しさはどのように説得的に基礎づけられるのか、ということである。つまり論理こそ肝要なのである。この理由づけがなければ、客観的かつ普遍妥当する社会的合意にはならないし、ただその場の空気で、情緒的に流れて合意のようなものが以心伝心的に漂って、明快な理由づけなしに、そこで重大なことが決められる恐れが十分にある。面倒くさくても、理由づけの正当性が議論されなければならない。

このさい氏は、一人が死ななければならないとしても、五人が助かるほうが良いという考えは、結果の優劣に道徳性を求めるという意味で、「帰結主義的な道徳論法」（ベンサムらの功利主義につながる）といわれ、それに対立するのは、五人を救うためであっても、

一人を殺すのは、定言的に（無条件に categorical）正しくないという意見だとされる（カントの定言的道德理論につながる）。つまりこうして、氏は、学生の議論の対立点が、すでに過去の哲学者の議論の再現となっているとみなそうとする。その意味で、氏は一方では、哲学的古典を現在によみがえらせ、他方では、現実生活を哲学的・原理的に基礎づけようとする。

もちろん、こうしたやや非現実的な事例は最初に出されただけで、あとは現実に行われた政治的・道徳的問題が次々と繰り出される。この事例の豊富さと、それに抽象的な哲学的原理を結合するところに、氏の特徴がある。よくこれだけの事例を集めたものだと思うほどである。

さらに殺人と正義の問題に関して、一九世紀イギリスで起こった海難事故として、船で漂流した四人の乗組員の物語が提起される（②上、三〇頁以下）。死期が近いように見えた男について、彼を殺して食べようという提案がなされ、事実、別の男が彼を殺してしまった。実におぞましい事件である。残された三人は、四日間、そのおかげで生き延びたのちに、無事救助された。そののち、裁判が始まった。そこで氏は、「生き残った彼らは有罪ではなく、道徳的に許されるか」と学生たちに問う。少数がそれに賛成し、他方、多数が有罪だと判定した。これは実際に起こった深刻な問題である。多くの議論ののち、「この殺人が正当化されるのは、殺された彼が、自分から『死ぬ』と同意したときである、彼は殉教者である」という意見と、「いついかなるときも殺人、さらに食人は非道徳的である」という意見に区別された。学生たちの議論のなかから、氏は、①殺人は正当化されえないとすれば、その権利はどこに由来するのか、②公正な手続きによって合意がなされれば、どんな結論も正当化されるのか、③そもそも同意があれば、なぜ道徳的に許容されるのか、という問題が提起されるとして、さらに進むのである。ある意味、この問題は、ドイツでいえば、ユルゲン・ハーバマースの提起してきた真理合意説の是非に関わる。

### 三 「『富』はだれのもの」という講義について

サンデル氏は、哲学者たちの議論を紹介し、そこから多様な現実問題を出して、それにたいして賛否の意見を聞いていく。そのさい、学生たちはおのずと自分の立場から相手（知的挑発を続けるサンデル氏ならびに対立的意見の学生）とディベート的な議論をすることとなる。そのさい氏は、意識的に、その現実問題に賛否の意見を出す学生たちの立場が、実際どういう哲学的議論と関わっているかを明らかにしていく。さらに以下では、講義の

なかから、二つの議論を紹介・検討したい。

ここで氏は、ロバート・ノージック、ミルトン・フリードマンら自己所有権（自分を所有するのは自分だ）を掲げるリバタリアン（自由原理主義者）が、所得や富を裕福な者から貧しい者へ再分配することで行われた課税法や政策をある種の「強制」であり、「盗み」であるということをも主張するとき、その考えが正しいかどうかを議論する。そのさい具体的に世界一の金持ちであるビル・ゲイツを実例に出し、彼の報酬は、実一秒あたり一五〇ドルと計算されるというような話も出す。このさい、功利主義は多くの貧乏人をゲイツら金持ちへの課税で救済できるから、再分配を要求するだろうが、リバタリアンは反対する。このリバタリアニズムの立場を支持する学生たちを三人呼び出し、リバタリアン・チームをつくり、彼らを批判する学生たちと多様に議論させる。リバタリアニズムの側からすると、正当な労働で得た収入に課税することは、盗みであるだけではなく、その人間の人生と労働からある程度の時間を奪ったことになり、国家が個人を部分的に所有し、奴隷として扱うことに等しいことになる。この議論は強力であろう。

これにたいして氏は、学生の議論の結果から、リバタリアンにたいする三つの反論を総括する。第一の反論は、貧者は金持ちより生活上、金を必要としているということ、第二は、民主的社会で議会の決定により税金を課すのだから、課税は奴隷制と同一視できないこと、第三は、ゲイツのような成功は他人の協力や社会の支持のおかげであるから、その借りを税金で返すべきこと、というものである（②上、一一一頁）。

最後の局面で、ある学生が、「人が社会のなかで生きているとき、『人は自分で自分を所有している』という前提そのものに問題があると思います」と、リバタリアンを批判する。サンデル氏もこの論点に強く注目する。だが氏は同時に、だからといって、個人を集団のより多くの幸福のための手段として利用するような功利主義の立場には戻れないという。なぜなら、その個人のかげがえのない自由の問題で、まさに功利主義は挫折したからだ。

#### 四 「愛国心と正義 どちらが大切？」という講義について

ここでは、アリストテレスに起源をもつコミュニタリアンと、カント的な「自由で独立した自己」を主張する立場が衝突する（②下、一六五頁以下）。道徳法則に従って行動するカント的な自律的個人によれば、「歴史や伝統など、自分がみずから選んだわけではない過去の事柄には縛られない」という立場をとる以上、カントの道徳哲学は、具体的な政

治的共同体のなかで善き生活を送る点に人間の目的ないし本質があるというアリストテレスの政治哲学には、真っ向から対立する。だが、コミュニタリアンは逆に、カントや現代で正義論を説くジョン・ロールズの立場には、道徳的・政治的な生活という側面がそっくり欠けており、さらに、何らかの集団の構成員の義務、忠誠心、連帯など、その人が同意した覚えがないとしても、人間には守らなければならない道徳的つながりがある、と批判する。つまりまったく自由な裸の個人というものはありえず、何らかの「負荷ありし自己」しか成立しない。この考えは、現代のリバタリアンの個人主義とも対立する。

こうした説明を学生たちに与えたのちに、氏は、以上の対立点を含んでいるさまざまな事例を挙げて、考えさせ、議論させる。親にたいする子どもの義務はあるのか、エチオピアで起こった飢饉にさいして、イスラエル政府が数百人のユダヤ人だけを救出したことは正しいのかどうか。これはある種偏った愛にすぎないのかどうか…。そして、これは広く、愛国心の問題につながるとされる。

これにたいし、学生の一人は、コミュニタリアニズムでは、何らかの共同体にたいする義務と義務が対立する可能性があるという問題点を指摘する。たとえば、第二次世界大戦中、フランスのレジスタンスのパイロットが、ドイツ占領下にあるフランスの故郷の爆撃命令を拒否したという事例である。ここでは、フランスへの愛国心と故郷への愛情が衝突する。他の学生は、自分を「人類」という究極のコミュニティの構成員とみなすことで、その問題は解決するというが、さきの学生は納得しない。別の学生は、愛国心の基礎には、入寮した新入生が段々とその寮に愛着や誇りをもつようになることがあり、これがコミュニタリアニズムのいう道徳的義務であるならば、これは単なる情緒的な偏愛とは異なると主張する。

ここで氏は、いままでの議論に現れた、コミュニタリアニズムへの反論の要点を総括するが、錯綜した論点を整理する、その手並みの鮮やかさはさすがである。そしてここから次の講義が開始される(②下、一八二頁以下)。このなかではまた、ロールズ正義論であっても、普通の市民には政治的義務はそもそもないが、自発的に同意したうえで政治的義務(選挙に出る、軍隊にはいるなど)を果たすことが可能である、これで十分ではないかという反論もあった。続いて、普遍的義務が優先されることを条件に、家族や国家への忠誠心を表明すべきであるという調停案も提起された。総括ののちに氏は、コミュニタリアニズムに批判的な人を集めてチームをつくり、この立場を擁護する人たちと論戦することを提案したりする。

さて、愛国心擁護派のある学生は、以上の議論を踏まえて、元ブッシュ大統領の政策には強く反対するが、それでも祖国にとっての最善の大義のためにそう抗議することは可能であると付加する。だから、これも愛国心の現れである…。これにたいして、「なぜそれが愛国心といえるのか」という反論が起こるが、別の学生は、コミュニティから生ずる義務や愛国心は、そのコミュニティに「道徳の白紙委任状」を与えてしまうわけではないと、弁護する。つまり批判的愛国心も可能であるというわけである。

氏は、ここではっきり議論すべきは、コミュニティへの忠誠心が普遍的な正義と競合したり、それを上回ったりすることがありうるかということだとして、さらなる議論の展開を促す。ある学生は、経済学の試験中、ルームメイト（男）がカンニングをするのを見たという事例を出す。そのとき自分は、彼には義務があるので、彼を大学当局に突き出しはしないという。もちろん、これは普遍的正義に合致する考えではない。サンデル氏は、この事例を積極的に取り上げ、この学生に賛成する人がいるかどうか、聞いていく（かなりの人数が拍手する）。反対する人はいないようであった。氏は、歴史的な事実として、さらに南北戦争の事例を挙げる。南部出身でかつて北軍大佐であったリーは、故郷の南部バージニアを攻撃することを拒否したのである。結局リーは、悩んだのちに、南軍の司令官となって、故郷のために戦ったという。このさい、単にリー将軍が「選択」をしたという問題ではなく、彼が何者でどこで育ったのかという物語的に生ずる忠誠心から、道徳的な葛藤が生じたのである。だが、こうしたコミュニタリアンの主張にたいしては、さらにある学生によって、コミュニタリアンの最大の問題点は道徳的義務に普遍的基準がないということだと指摘される。これはコミュニタリアンにとって、重大な問題提起であろう。

サンデル氏は、複雑で錯綜した論戦をまとめて、「おかげで問題が明確になってきた」「論戦に応じてくれてありがとう」と学生たちに謝意を表す。

## 五 サンデル氏のコミュニタリアニズムとは？

以上のディベートでは、賛成・反対の主張とその論拠が解明されるが、どちらが正しいかにまで議論は進められない。あくまでどういう論拠によってその主張が肯定されるのか、または反駁されるのかに主眼がある。だがこのままでは、相対主義のままで終わるだろう。もちろんそこでは、絶対的に正しいこともありえない。それでは、サンデル氏自身は政治哲学的にどういう立場をとるのだろうか。それは、『これからの「正義」の話しよう』の第一〇章「正義と共通善」で語られる（①三三四頁以下）。まず氏は、講義のなかで、

正義にたいする三つの考えを探ってきたという。第一は、正義は功利性や福利を最大限にすること（最大多数の最大幸福）という、ベンサムのような立場である。第二は、正義とは、自由市場における個人の選択の自由を最大限にするというリバタリアニズムか、平等な原初状態で人々がおこなうはずの仮説的選択を重視する立場（リベラルな平等主義者の見解）から構想されるものである。第三の立場では、正義には具体的に、ある種の共同体のなかで美德を涵養したり、共通善を追求したりすることが含まれるという。氏は、公正な社会は、ただ効用を最大限にしたり、個人の主体的な選択の自由を保証したりするだけでは達成できないとして、第三のコミュニタリアニズムの立場を明確に採用する。

氏のコミュニタリアニズムの独自性は、同性婚問題に関する議論のなかで明白に語られる。通例、コミュニタリアンは既存の伝統的な共同体的制度を重視しがちであり、たしかにまた、それを合理化する十分な客観的根拠を欠いていると思われる。私自身は以前に、コミュニタリアニズムの立場をチャールズ・テイラーから学んだが、彼が異文化の相互承認を主張するときも、それはまだ、抽象的で説得的なものになっていないと思われる<sup>4</sup>。同性婚論争に関しては、裁判問題になってきたと紹介されるが、単に個人同士が自律的に選択したというのみの正当化では不十分であり、氏によれば、結婚（とくに同性婚）が名誉とコミュニティの承認に値するかどうか、つまり共同の社会制度の目的を果たせるかどうかにかかっている。ここではアリストテレス風にいえば、結婚の美德と目的（テロス）、つまり何らかの価値観の構築が問題になっている。

したがって、氏のコミュニタリアニズムの考えは、単に特定の伝統的な価値観をそのまま是認するようなそれとは明確に異なる。彼の立場は、特定のコミュニティを超えたかたちで共通善を考えるものであり、こうして正義の問題にも接近できるのである。そこで結論されたのは、単に異性同士の結婚を承認するだけに終わるのではなく、しかし一夫多妻制などを認めずに、同性婚をも正しいとする新しいかたちの結婚観である。結婚の目的は、生殖を不可欠のものとしてせず、二人の愛情関係、相互関係、親密さ、貞節がそれである（マサチューセッツ州最高裁判所の見解でもある）。だから氏のコミュニタリアニズムは、進歩的な要素と結合するのである。これはきわめて注目すべき見解であろう。

---

<sup>4</sup> 拙著『現代を読むための哲学』創風社、二〇〇七年所収の第二章「近代的価値観から多文化的共生への歩み」を参照。さらに同上、第三章「『相互文化哲学』とヨーロッパの自己批判」では、さらに広く、異文化の対立問題が扱われた。



以上のように考えると、ディベート型講義は、まさに氏の共同体構想を形成するための不可欠の実践でもあった。つまり彼のコミュニタリアニズムは、単なる保守主義者のように既成の伝統的な共同体的要素を称揚すればいいのではなく、だが、単なる自由主義のように価値観抜きの個人の選択に任せればいいのでもなくて、より普遍的な制度や価値観を共同で形成することを必要とするものであった。議論と対話による共同実践がおこなわれなければ、彼の新しいコミュニタリアニズムは成立不可能ともいえる。

したがって、氏がハーバード大学でのディベート型の講義をおこなう理由は、ある意味、氏の政治哲学に密接に結合しているといえよう。講義の進行は、いわば氏と学生たちの共同の産物であり、学生の参加を不可欠とする。豊富な事例の列挙とともに、ここに講義の人気の要因がある。

## 六 ディベート型講義のあり方と意義

それでは、氏の講義スタイルは実際にはどういうものか。かつて私は、すでに一九八二、三年のときに、ゼミの学生たちのあいだでかなり本格的なディベートを二度実践して、その実践記録集を学生とともに作成したことがあったし、さらにまた、一九九五年前後に五、六回、哲学講義のなかで、ゼノンのパラドクス（「飛ぶ矢は飛ばず」など）を中心に哲学者たちの対立する見解を提出して、ディベート的な試みをおこなったことがあった<sup>5</sup>。そういうわけで、このサンデル氏のディベート型講義は、私にとってきわめて興味深い。

さて、テレビを視聴したかぎり、氏はきわめてメリハリの効いた身振り手振りで、しかもはっきりした英語で訴えかける。そしてつねに、壇上を動き回り、注意を集める。ディベートになると、氏自身も教室のなかにはいっていき。こうしたレトリックの巧みさは、なかなか日本人に真似のできるものではないと実感した（実は、レトリックのなかには、単に弁論や修辞のみではなく、身振り手振りを工夫する「行為」という部門も属する）。学生たちもよく考えられた主張を、さまざまに繰り出すが、それをすばやく整理して、さらなる問題へと誘う氏の手法は鮮やかというほかはない。そのさい、単に賛成か反対かを学生たちは意思表示するのみではなくて、ただちにその論拠を聞かれるので、そうした議論法に慣れていく必要がある。これが表現されなければ、議論は開始できない。それから、

---

<sup>5</sup> 拙著『対話の哲学』こうち書房、一九九三年、八五―九五頁参照。

つねに発言者の名前を聞き出し、次からはその名前で学生たちを呼ぶというのは、欧米的なコミュニケーション法であると思われるが、しかし記憶力がよくなければ、これもできないと実感した。しかも氏は、懸命に考えて発言する学生たちをおおいに激励し、その労をねぎらう言葉を投げかける。そしてそこにはつねにユーモアが漂い、また学生たちもそのユーモアに笑いなどで生き生きと反応する。まさに講義は教師と学生の共同合作である。たしかに、このめまぐるしい論戦は、それについていくのに多大な思考力と緊張をともなうが、他方、それを解きほぐすかのように、氏はつねにユーモアを発し、ときどき学生にツッコミを入れる。だが、余計な冗談、ギャグなどは一切いわない。

教室には黒板のようなものはないが、上方には、モニター画面のようなものがあって、パワーポイントを使って、画像や文章を映し出しているようである。氏は、そうしたメディアもフルに利用していると見られる。そして、事前に学生たちは、テーマについてブログなどで意見を書き込み、議論もしているようだ。それはおそらく、(複数の) TA (ティーチング・アシスタント) の学生によって準備されており、講義にさいして発言するための学生も前もって選ばれている。したがって、そうした周到な準備が、あの巧みな講義の前提にあるといえよう。

さて氏は、来日して東大で特別講義をおこなった。そこでは、「イチローの年俵は高すぎるか」から始まり、太平洋戦争を念頭に置いて、「戦後世代は戦争について責任をとるべきか」「日本への原爆投下にさいしてオバマ大統領は責任をとるべきか、謝罪すべきか」というような、かなり刺激的なテーマについて議論がなされた。この議論の内容については紹介できないが、氏は最後をこう締めくくった。

私たちは異なった意見について議論してきた。これらの問題は、完全に合意することのないものだ。しかし、私たちは今日の議論で前進し、自信を得た。異なる価値観、宗教的信念に関して、意見の相違を際立たせるなかで、自信と美徳と力を得た。この場所で一〇〇〇人のあいだで十分な議論ができたならば、この空間だけではなく、もっと広く学びあえる。これこそ公共的生活を実現できる道である。…何よりも感動的で刺激的だったのは、ここにいる君たちと二つの講義でおこなった議論が、「哲学は世界を変えることができる」と示してくれたことだ。君たちは意見を闘わせ、正義についてともに考える力を見せてくれた。どうもありがとう (②下、二七〇頁)。

参加者はのちほど感想として、「サンデル氏はオーケストラの指揮者のようだ」、「人間的にも素晴らしい人だ」、「若い人が素晴らしい意見を述べてよかった」などと述べた。

ある国会議員は、「政治こそ道徳を考えなければならないことがわかった」と述べた。サンデル氏自身は、「現在グローバリゼーションが貧富の格差をひどくしている。いまこそ正義についておおいに議論すべきである」と述懐した。これはたしかに共感できる意見であった。

以上のように、日本の参加者たちは氏におおいに鼓舞されて、講義のなかで議論することの意義を実感したのである。ところで、欧米人に伍して、本当に日本人は議論やディベートができるのだろうか。最後に氏は、日本人の友人が「日本人は恥ずかしがり屋であって、とくに政治的議論は好まない」と忠告してくれたことに言及した。だが氏は、「私が正しく、彼は間違っていた」と述べて、場内の笑いを誘った。だがもちろん、欧米と日本の文化の相違は、考えることを奨励しない受験勉強体制の存在もあって、そう簡単に克服できないだろう。教育体制を大幅に改革するなかで、教師側、学生側ともに講義をつくっていくという努力がなければ、よい講義にはならない。サンデル氏の講義は、受験勉強体制と「ゆとり教育」を揺れ動くだけの日本の教育体制に、大きな示唆を与えてくれたといえる<sup>6</sup>。

---

<sup>6</sup> 私は『ウィーン発の哲学』未来社、二〇〇〇年、第二部などで、オーストリアと日本のあいだにおいてであるが、その教育のあり方がまったく異なることに注目してきた。この彼我の差をまず了解すべきである。